



小杉 信博 高エネルギー加速器研究機構・物質構造科学研究所・所長
(前 光分子科学研究領域 教授)

分子研の人たちとの四半世紀

こすぎ・のぶひろ／1976年京都大学工学部卒、1981年東京大学大学院修了、理学博士。東京大学理学部助手、講師を経て、1989年6月京都大学工学部助教授、1993年1月分子科学研究所教授、2018年4月より現職。



書き始めから皆さんの予想（苦労しているのではないかと）を裏切るように申し訳ないのですが、現在の職に就いて3ヶ月、緑がいっぱいの広々としたつくばキャンパスの中で居心地の良さを感じ始めている今日、この頃です。昨年、この職のオファーがきたときには、自分にできることがあるのだろうかと思いついて逃げ回っていたものの、覚悟を決めて来てみたら同じ大学共同利用機関なのでやることはほぼ同じでした。ただ、微妙に違うところがいろいろあって、その違いを面白く思ったりしながらひとつひとつこちらの仕様に置き換えていくうちに、分子研に四半世紀以上もいたにも関わらず、3ヶ月ですっかり頭の中が入れ替わってしまいました。もちろん、予定（定年）より1年前に突然異動することになってしまい、私が手がけていた諸々のことの引き継ぎが完全ではなく、現時点でも助教一人も含めて研究室が残っていますので、これらのことは忘れずにしっかりと整頓します。もうしばらくお待ちください。

「去るにあたり」という内容で、四半世紀の思い出をひとつひとつ語ると、たぶん、分子研レターズ一冊分くらいになると思います。研究所に対する思い出は、井口所長から川合所長まで6

人の思い出とダブりますし、UVSORや研究室に対する思い出はメンバーそれぞれの思い出とダブります。四半世紀の間に同僚だった人たち、若くしてなくなられた人たちもいます。私にとっては、分子研＝人に尽きます。「去るにあたり」の字数に限られる中で思い出を選べと言われても無理です。いろんな人がやってきて、いろんな人が去っていく。新しいサイエンスが生まれては、人とともに去っていく。そういう中で変わるものがあり、変わらないものがある（以前、私は分子研レターズのコラム欄でこれを分子研のカルチャーと称しました）。変えてはいけないものもあり、変えなければならぬものもある。そして、それらを決めていくのも人。このあたりは、分子研レターズで最近、始めたコラム欄「覽古考新」からも感じとれるのではないかと思います。

1976年、修士1年生のときに、分子研教授の井口先生の特別講義で分子研創設（1975年）の話を聞いていたので、振り返ってみると、研究を始めたときから分子研の存在は刷り込まれていました。ただ、その後、分子研内部から私に助手の話や助教授の話があったときにはそれぞれ辞退した経験があり、分子研には距離を置いていた

気がします。外部の先生から話があって、ついに分子研に教授として着任することになったものの、数年は居心地が悪く、落ち着きませんでした。当時は繊細すぎました。胃もキリキリしていました。それでも四半世紀もいるとさすがに分子研に慣れた自分が居ました。ずいぶん、凶太くなりました。研究面では、教授選考のときに提案した研究計画（孤立分子や分子結晶から、クラスター、液体、有機薄膜などの相互作用系への各種軟X線分光の展開）は、UVSOR-Iの性能では不可能な内容でしたが、UVSOR-II、UVSOR-IIIへの高度化によって次々可能になりました。私を教授に推して下さった外部の先生の墓前になんとか成果報告できるところまでは来たのではないかと考えています。

分子研の四半世紀の間で様々な人々との交流から自然と身についた、ものの見方、考え方は、新しい職場でもいろいろと活かしている実感があります。今の自分があるのは分子研の人たちのおかげです。四半世紀もの間、ありがとうございました。

柳井 毅 名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所 教授
(前 理論・計算分子科学研究領域 准教授)

傷だらけの分子研人生

やない・たけし / 2007年1月に分子研理論・計算分子科学研究領域の准教授として着任。2018年4月に、名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所に転出、量子化学研究室を主宰。同大学大学院理学研究科物質理学専攻（化学系）を兼任。



古い奴だと思いでしょうが、古い奴こそ新しいものを欲しがらるものでございます（引用：鶴田浩二の「傷だらけの人生」）。任侠映画にハマったことがありました。私が分子研で専門とした量子化学の理論手法は学問的にはかなり確立してきています。この基礎を研究している者は古い奴なのかもしれません。分子研では、およそ10年間、爪痕を残そうと、量子化学および計算化学の研究に打ち込ませて頂きました。学問の発展、既存の考え方からの脱却を達成するには、成功失敗に拘わらず、根本的な基礎に立ち返ること

それ自体が重要であり、研究の楽しさの根源だと考えております。分子研では、特に口だしも受けず、自由にかつ手厚く、私なりの考え方で研究をさせて頂きました。それが当たり前でなく、日本の学術研究のスタンダードからすると、贅沢というか“ヤクザ”なことだと分かったのは、アメリカから帰って数年経ってからでしょうか。そして、そのような方針で“筋を通す”ことがむしろ分子研にいる使命ではないかと都合よく感じたりもしましたが、そういう訳にもいかず、いろいろ苦勞もしました。とはいえ、研究グループの仲

間たちの力量と頑張りのおかげで、分子研での研究を進めることができました。所長そして教授、准教授の先生方、その他の研究者や事務スタッフの方々には、多方面でお力添え頂き、充実した「傷だらけの分子研人生」を送らせて頂きました。大変お世話になりました。この場を借りてお礼、感謝申し上げます。異動先とは距離的にも近くにありますので、今後もお世話頂くことになるかと思いますが、宜しく願い申し上げます。

高木 康多 高輝度光科学研究センター（JASRI） 主幹研究員
(前 光分子科学研究領域 助教)

分子研での10年

たかぎ・やすまさ / 2000年東京工業大学理学部卒業、2005年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、博士（理学）。2005年理化学研究所播磨研究所の研究員を経て、2007年9月より分子科学研究所・物質分子科学研究領域（横山グループ）助教、2017年11月より現職。



分子研には30歳の9月に着任しました。そしてほぼ10年を過ごして、40歳の11月に現職であるSPring-8の高輝度光科学研究センター（JASRI）に転出しました。私の30代のほぼすべてを分子研で過ごしたことになります。

分子研に着任する前は理研の博士研究員としてSPring-8に常駐しており、放射光と走査トンネル顕微鏡（STM）を組み

合わせた放射光励起STMの開発に従事していました。2007年9月に分子研に着任してからはUVSORで磁気円二色性（XMCD）装置を用いた研究を始めました。STMによる構造解析は行っていましたが、主軸はXMCDによる薄膜磁性の解析でした。そこからフタロシアニン等の分子を使った実験なども始めました。私の研究分野は学生時代からマイクロコピーと

表面構造が中心であったので、XMCDにおける吸収分光のスペクトロスコピーはなかなか勝手が違いましたし、有機分子については物理科出身の私からするとまた違う世界に触れた感じでした。

さらに2011年からは、NEDOの燃料電池関連のプロジェクトに関わるようになり、SPring-8のBL36XUに雰囲気制御型硬X線光電子分光装置を立ち

上げることになりました。その仕事として、仕様書の策定から、業者との折衝、図面引きまでやりました。おかげで、様々な規格や部品について詳しくなりましたし、3D CADも扱えるようになりました。また、この仕事がうまくいったおかげで、化学会のほか、燃料電池だけでなく触媒や電気化学の学会などにも参加するようになり、これまでにない分野に関わることも増えました。

分子研での人事面接のとき「分子研は化学系の研究所だけど、物理分野出

身の君はどうしていききたい？」という趣旨の質問を投げかけられ、「物理という少し異なる視点から、新たな発見をして貢献していきたいと思います」というようなことを答えた記憶があります。私がこの十年でどれくらい貢献できたかはわかりませんが、私自身は物理から化学へと見聞を大きく広げる貴重な経験をさせていただきました。

理研の博士研究員から、分子研を経て、現職でまたSPring-8に戻ってきました。分子研の10年で得た経験で、私

自身のモノの見方、考え方は大きく変化したと感じます。この成長を今後の研究でうまく還元できるように、そして新たな経験を求めて日々精進していきたいと思います。

最後に、所長、物質分子科学研究領域の先生方、横山先生およびグループの関係者の皆様、分子研のすべての方々に感謝を表したいと思います。お世話になりました、ありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。

中野 路子 (前 機器開発技術班 技術職員)

技術職員として過ごした13年

なかの・みちこ / 2005年3月に名古屋市立大学院薬学研究科博士前期課程を修了後、同4月より分子科学研究所技術課の技術職員として採用。920MHz NMRのオペレーターを9年ほど担当し、2014年7月に装置開発室に異動後は、リソグラフィや3Dプリンタによる依頼製作を担当。2018年1月に退職。



分子科学研究所の技術職員として13年弱お世話になりました。お世話になった分子研の先生方、技術職員の皆様、そしてユーザーとして私を育ててくださった外部の方を含めた利用者の方皆様に厚くお礼申し上げます。

私が就職したのは、担当する920MHz NMRの立ち上げ作業が最終調整に入った頃でした。当時、女性の技術職員や女性の先生もほとんどいらっしゃらず、男性社会の分子研で世界最高スペックのNMR装置を担当するという一方で、新人の私はずいぶん虚勢も張っていたように思います。磁場が大きいことはいいいことばかりではありませんでしたが、利用者の方とともにいろいろな新しい測定に挑戦させていただくことができました。そんな920MHz NMRも昨年役目を終え、シャットダウンとな

りました。3年前にNMRの担当は離れていますが、同時期に導入されて同時期に役目を終えた装置に「お互いお疲れ様」という気持ちになりました。

装置開発室に移動してからは、ものづくりという未経験の世界を経験させていただき、とにかく新鮮な毎日でした。3Dプリンタでの分子模型の製作という新しい仕事にも参加させていただき、失敗を重ねた末に研究者の皆さんのもとにいろいろな模型を残すことができたことは、一つの達成感を与えてくれました。今また新しい形で3Dプリンタの活用が進んでいると聞き、嬉しく思います。

技術職員という仕事は、正規職員という安定した一面もありましたが、分子研では研究グループの入れ替わりが多く、必要とされる技術も大きく変化

する状況にあり、そんな中で自分も何か対応していかなければ、ふっと取り残されてしまいそうな不安定な面もありました。現状維持していかなければならないことと、新たに挑戦することとの両立やそのバランスはとても難しい仕事だったと思います。

今は群馬の地で少しゆっくり、食べ物や生活に1つずつ向き合った毎日を送っています。織物の産地として伝統ある桐生の町を散歩すると、機織りのカシャンカシャンという音が聞こえ、昔からの豆腐店や八百屋さんが元気に店を開いています。私の好きな山が近くに見え、行きたい温泉もたくさんあり、しばらくは群馬の生活をエンジョイ中です。